喧嘩商売　完全解析ブック

田中　大也

目次

第一章　喧嘩商売　ストーリー概説

第二章　キャラクター分析

佐藤十兵衛

高野照久

山田綾子

石原一茶

島田武

佐藤萌

佐藤俊太郎

ビクトリア

多江山　里

第三章　喧嘩商売の特徴とその源流　木多作品との共通点を読み解く

パート分け

格闘シーン

徹底した下ネタ

主人公・ヒロイン・ブスに見る共通点

秘密バクロ

打ち切り

第四章　喧嘩商売の「謎」を読み解く

なぜ、佐藤十兵衛はたった五年であそこまで強くなれたのか

十兵衛、もしかして喧嘩が嫌い？

危険がいっぱい　十兵衛の日常

高野の肌の色が変わったのは何故？

高野が道場破りを敢行した理由

高野の師、青木とは何者なのか

和解を果せた高野

十兵衛たちが通っている行座宇都宮高校ってどんな学校？　偏差値は？

佐藤一家の性に対する認識はどんな感じ？

十兵衛の祖父母はどこへ行った？

七年失踪していた俊太郎。財務省のキャリアがそんなことして大丈夫なの？

「地獄カレー」を分析してみる

「宇都宮ラッパー」は実用的なのか

十兵衛が大好きなレモン牛乳って？

女子高生ハンター島田は、いつから女子高生に魂を引かれているのか

意外に凄い！？　女子高生ハンター島田の「実力」

お似合いのカップル？　島田と多江山

「島田方程式」は、果たしてどこまで実戦的なのか

山田綾子は、何であんなに勘違いしちゃうの？

フルコンタクト空手の実際
総合格闘技の実際
餃子の街　宇都宮

第五章　十兵衛流格闘術考察

十兵衛流格闘術実践編　こうすれば佐藤十兵衛になれる！？
これから喧嘩商売は、どんな展開を迎えるのかを予想してみる
後書き

巻末資料　十兵衛流格闘術技表&解説

第一章　「喧嘩商売」ストーリー概説

「喧嘩商売」は、２００６年（平成十八年）で漫画家生活十周年を迎える漫画家、木多康昭氏が、これまで主戦場としていた少年誌から、青年誌へとフィールドを変えた、記念すべき作品だ。

ストーリーは、高校生、佐藤十兵衛が、絡んできたヤンキー数名を血祭りに上げるところから始まる。不良を倒した後、転校の挨拶を練習するなど（実際には、ヤンキーにビデオカメラを買ってこさせた）転校後の好感度のアップに余念のなかった十兵衛だったが、ホールルーム終了後の休み時間に、昨日倒したヤンキーとヤクザの襲撃を受ける（この彼のイメージ戦略は脆くも崩れ落ちてしまったわけだ）。

ヤクザを撃退した後、十兵衛は、自分が不良にリンチされている所を助けてもらってから、ずっと目標にしてきた高野照久を発見、クラスメートのビクトリア（ハーフながら不細工）との仲を強引に取り持つ。自分の意思に反してビクトリアと付き合うことになり、更には肉体関係まで結んでしまった高野は、十兵衛を敵と認識、同門の友人、石

原一茶らを介して、十兵衛を調べ上げた後、打倒しようと考える。復讐の意味合いが強いが、十兵衛が単なる素人ではなく、大勢のヤンキーやヤクザを倒せるほどの実力の持ち主だということを、喫茶店で小耳に挟んでしまったことも理由の一つである。

高野の代わりに十兵衛と対決した石原は、ただの一撃もヒットさせることは出来ず、十兵衛に完敗してしまう。それを間近で見ていた高野は、十兵衛の洗練された喧嘩技術に驚異を感じるとともに、今まで自分が習い覚えてきた技術の実践性に（フルコンタクト空手　進道塾青木派）疑問を感じ、師匠の青木裕平にルール無しの組手を要求する。しかし、青木は全く取り合わず、逆に食い下がる高野に対して、破門を宣告する。「これから本当の空手を始める」と言い放った高野は、道場破りを敢行し道場生全員を倒すことで、青木とのノールールの組手を実現させる。圧倒的な体格差、連戦によるスタミナ切れによって大苦戦を強いられる高野だったが、最後は青木の帯に足を引っ掛け、顔面を膝で叩くという奇襲作戦によって勝利をものにする。それを見ていた十兵衛も、「やっぱあいつつえーわ」と、高野の底知れぬ実力を改めて実感するのだった。

何気ない話の流れから、クラスメートの山田綾子を伴って、高野を倒しに行こうとするが不在で、代わりに勧誘に来ていた総合格闘技団体の元プロ格闘家を打倒するなど、

実力を見せ付けていた十兵衛と高野は、互いに魅かれあうようにして対決することになる。(直接的には、十兵衛を高野がストーキングしていたことが原因のように描かれてはいるが、本当のところはわからない)二人の戦いはヒートアップし、十兵衛は鼻骨を骨折し、高野の顔面を真っ赤に染めるほどのダメージを負う。

その後、遠い間合いからの前蹴りに活路を見出した高野は、十兵衛を敗北寸前にまで追いやるが、「やってるヤツが相手なら技をパクれ!」という師匠筋に当たる男のアドバイスを思い出した十兵衛は、高野が青木に対してしてみせた、帯に足をかけての飛び膝蹴りで、何とか勝利を得る。

宿願を達成した十兵衛だったが、今度は別のフィールドでの戦いが待っていた。自分をストーキングしていたのは高野ではなく、「陰獣」の異名を取る、「多江山　里」だったのだ。顔やスタイルには特に問題はなく、三度の食事よりセックスが大好きな、やりたい盛りの十兵衛にとっては絶好とも言える相手だったが、彼女は担任の島田いわく、「世界で二番目の下げまん」で、関係した男のほとんどは廃人になってしまったという。可愛い生徒のために一肌脱いだ島田に運命を委ねた十兵衛だったが、それがいけなかった。体育倉庫に体操服を装着して訪れた陰獣の前に、島田はあえなく陥落し、十兵衛の

代わりに彼女を振るどころか、関係し、しかも中出ししてしまう。
その後、複合的な理由で島田を成敗しようとした十兵衛だったが、直前で陰獣に阻まれ、周囲の評判を著しく下げてしまう。高野も、ビクトリアとえらい事になってしまったが、十兵衛もまた、女性関係のトラブルとは、無関係ではいられなかったようだ。
以上が、喧嘩商売の（コミックス四巻までの）ストーリーの大まかな流れとなる。「最強の格闘技は何か」という、これまで、長い間問われていながらも、いまだ決着の付いていない難しい問題に手を出しており、試合では使えないような技を積極的に駆使して戦いを繰り広げる佐藤十兵衛を描く木多氏の筆致や視点は非常に丁寧で、硬質ですらある。学生が主人公の格闘漫画に良くありがちな「学校最強」や「全国制覇」といった概念が全く出てこないのはやや珍しくはあるが、全体的に見るならばこの作品は、相当にスタンスがしっかりとした格闘漫画だと言うことができる。
ただ、この漫画には、一つ大きな特徴が別に存在する。本筋とは関係がない、言わばギャグパートである。その中では十兵衛は、「今日中にペティ（ペッティングのこと）れるはずだったのに、ヤンキーの襲撃で上手くいかなかった」うっぷんを晴らすために、クラスメートの山田綾子の胸をもみしだき、勃起した男根を、パンツ越しではあるが彼

女の顔に押し当て、腰をカクカクさせた挙句に、家に上がりこんでセックス寸前まで行ったり（第一話）、高野は自分の意見が言えない性格が災いして、中学校の時に同窓だったビクトリアと本番をする羽目になって悶絶したり（しかもコンドームに針で穴を開けられた。第三話）、朝勃ちを勘違いされた妹に通報されて逮捕され、逃げ出してきたところでまたも警察に誤解され、十兵衛ばかりか親子ともども拘束されてしまう（第十四話～十五話）など、下ネタ関係に集中したギャグが非常に多く、場合によっては、一話丸ごと使って描かれることも珍しくないのだ。熱血ストーリー漫画として喧嘩商売を見るのであれば、必要ないようにも思える展開であるのだが、こうした一連の「無駄」が、登場人物のキャラクターを際立たせ、ストーリーをより深いものにしているのだ。また、ギャグパートを随所随所に入れることによって、今まで作品を読んでいなかった人でも、すんなりと読み進めることができるようになっており、（この作品に限らず、木多氏の作品のギャグは、キャラクターについて深い理解がなくても、自然に笑える類のものである）これは、木多氏独特のシステムなんじゃないかと推測することができる。

木多氏はしばしば、単行本に書き下ろす形で、仕事の愚痴や内輪ネタを盛り込むことがあるが、この「喧嘩商売」においても、それは健在だ。一巻では仕事に対するやる気

の無さを、二巻では結婚式で、編集に激しく監視される自身の姿を（木多氏の作品に古くから触れている人にとってはニヤリとさせられる演出だ）、三巻では、一話目の内輪ギャグについての内幕を巻末付録という形で書いている。また、二巻と三巻の巻頭では、「序章」として、八ページほどの漫画を添えているが、これも書き下ろしの可能性は高い。この手法は、単なるファンサービスという意味合いは確かにあるが、作者のキャラ付けがなされることによって、読者に親近感が生じ、関心を持ってもらいやすくなる効用を期待してのことと見るべきなのかも知れない。事実、木多氏の過激なセルフ・ドキュメントタッチの暴露漫画は、それ自体が独立した芸になっており、極端な話、「漫画には興味ないけど作者がどうなっていくのかには興味がある」層までをも生み出している。

このように、漫画のストーリーはもちろんだが、思いつきで描かれているようにも見えるギャグパートや暴露話も、作品を構成する重要な一要素になっているのだ。